校異源氏物語・はし姫

そのころ世にかすまへられ給はぬふる宮おはしけりはゝかたなともやんことなくものしたまひてすちことなるへきおほえなとおはしけるをときうつりて世中にはしたなめられ給けるまきれに中　くいとなこりなく御うしろみなとものうらめしき心　くにてかた　くにつけて世をそむきさりつゝおほやけわたくしにより所なくさしはなたれ給へるやうなりきたのかたもむかしの大臣の御むすめなりけるあはれにこゝろほそくおやたちのおほしをきてたりしさまなとおもひいて給ふにたとしへなき事おほかれとふるき御契のふたつなきはかりをうき世のなくさめにてかたみに又なくたのみかはし給へりとしころふるに御こものし給はて心もとなかりけれはさう　くしくつれ　くなるなくさめにいかておかしからむちこもかなと宮そとき　くおほしのたまひけるにめつらしく女君のいとうつくしけなるむまれ給へりこれをかきりなくあはれとおもひかしつきゝこえ給にさしつゝきけしきはみ給ひてこのたひはおとこにてもなとおほしたるにおなしさまにてたひらかにはしたまひなからいといたくわつらひてうせ給ぬ宮あさましうおほしまとふありふるにつけてもいとはしたなくたへかたき事おほかる世なれとみすてかたくあはれなる人の御ありさま心さまにかけとゝめらるゝほたしにてこそすくしきつれひとりとまりていとゝすさましくもあるへきかないはけなき人　くをもひとりはくゝみたてむほとかきりある身にていとおこかましう人わろかるへきことゝおほしたちてほひもとけまほしうしたまひけれとみゆつるかたなくてのこしとゝめむをいみしうおほしたゆたひつゝとし月もふれはをの　くおよすけまさり給ふさまかたちのうつくしうあらまほしきを明くれの御なくさめにてをのつからみすくし給後にむまれ給し君をはさふらふ人　くもいてやおりふし心うくなとうちつふやきて心にいれてもあつかひきこえさりけれとかきりのさまにてなに事もおほしわかさりしほとなからこれをいと心くるしとおもひてたゝこの君をかたみにみ給ひてあはれとおほせとはかりたゝひとことなむ宮にきこえをきたまひけれはさきの世の契もつらきおりふしなれとさるへきにこそはありけめといまはとみえしまていとあはれと思ひてうしろめたけにのたまひしをとおほしいてつゝこの君をしもいとかなしうした

てまつりたまふかたちなむまことにいとうつくしうゆゝしきまてものし給けるひめ君は心はせしつかによしあるかたにてみるめもてなしもけたかく心にくきさまそし給へるいたはしくやむことなきすちはまさりていつれをもさま　くにおもひかしつききこえ給へとかなはぬ事おほくとし月にそへて宮のうちさひしくのみなりまさるさふらひし人もたつきなき心ちするにえしのひあへすつき　くにしたかひてまかてちりつゝわか君の御めのともさるさはきにはか　くしき人をしもえりあへ給はさりけれはほとにつけたる心あさゝにてをさなきほとをみすてたてまつりにけれはたゝ宮そはくゝみ給ふさすかにひろくおもしろき宮のいけ山なとのけしきはかりむかしにかはらていといたうあれまさるをつれ　くとなかめ給ふけいしなともむねむねしき人もなきまゝに草あをやかにしけり軒のしのふそ所えかほにあをみわたれるおり　くにつけたる花もみちの色をもかをもおなし心にみはやし給ひしにこそなくさむこともおほかりけれいとゝしくさひしくよりつかむかたななきまゝにち仏の御かさりはかりをわさとせさせ給てあけくれおこなひ給かゝるほたしともにかゝつらふたにおもひのほかにくちおしうわか心なからもかなはさりける契とおほゆるをまひてなにか世の人めいていまさらにとのみとし月にそへて世中をおほしはなれつゝ心はかりはひしりになりはてたまひてこ君のうせたまひにしこなたはれいの人のさまなる心はえなとたはふれにてもおほしいて給はさりけりなとかさしもわかるるほとのかなしひはまた世にたくひなきやうにのみこそはおほゆへかめれとありふれはさのみやは猶世人になすらふ御心つかひをし給ひていとかくみくるしくたつきなき宮のうちもをのつからもてなさるゝわさもやと人はもとききこえてなにくれとつき　くしくきこえこつこともるひにふれておほかれときこしめしいれさりけり御念すのひま　くにはこの君たちをもてあそひやう　くおよすけ給へはことならはし五うちへんつきなとはかなき御あそひわさにつけても心はへともをみたてまつり給ふにひめ君はらう　くしくふかくおもりかにみえたまふわか君はおほとかにらうたけなるさましてものつゝみしたるけはひにいとうつくしうさま　くにおはす春のうらゝかなる日かけに池の水とりとものはねうちかはしつゝをのかしゝさへつるこゑなとをつねははかなきことにみたまひしかともつかひはなれぬをうらやましくなかめ給ひて君たちに御ことゝもをしへきこえたまふいとおかしけにちひさき御ほとにとりとりかきならし給ふものゝねともあはれにおかしくきこゆれは涙をうけたまひて

うちすてゝつかひさりにし水とりのかりのこの世にたちおくれけん心つくしなりやとめをしのこひ給かたちいときよけにおはします宮なりとし比の御おこなひにやせほそり給にたれとさてしもあてになまめきて君たちをかしつき給ふ御心はえになをしのなえはめるをき給ひてしとけなき御さまいとはつかしけ也ひめ君御すゝりをやをらひきよせてゝならひのやうにかきませ給ふをこれにかき給へすゝりにはかきつけさなりとてかみたてまつり給へははちらひてかきたまふ

いかてかくすたちけるそと思ふにもうき水とりの契をそしるよからねとそのおりはいとあはれなりけりてはおいさきみえてまたよくもつゝけ給はぬほと也わか君とかきたまへとあれはいますこしおさなけにひさしくかきいて給へりなく くもはねうちきする君なくは我そすもりになりははてまし御そともなとなえはみておまへにまた人もなくいとさひしくつれ くけなるにさま くいとらうたけにてものしたまふをあはれに心くるしういかゝおほさゝらん経をかたてにもたまいてかつよみつゝさうかをし給ひめ君にひわわか君にさうの御ことまたおさなけれとつねにあはせつゝならひ給へはきゝにくゝもあらていとおかしくきこゆちゝみかとにも女御にもとくをくれきこえ給ひてはかはかしき御うしろみのとりたてたるおはせさりけれはさゑなとふかくもえならひたまはすまいて世中にすみつく御心をきてはいかてかはしりたまはむたかき人ときこゆるなかにもあさましうあてにおほとかなる女のやうにおはすれはふるき世の御たから物おほちおとゝの御そうふんなにやかやとつきすましかりけれとゆくゑもなくはかなくうせはてゝ御てうとなとはかりなんわさとうるはしくておほかりけるまいりとふらひきこえ心よせたてまつる人もなしつれ くなるまゝにうたつかさのものゝしともなとやうのすくれたるをめしよせつゝはかなきあそひに心をいれておいゝて給へれはそのかたはいとおかしうすくれたまへり源氏のおとゝの御おとうとにおはせしをれせい院の東宮におはしましゝときすさく院のおほきさきのよこさまにおほしかまへてこの宮を世中にたちつき給ふへくわか御ときもてかしつきたてまつりけるさはきにあひなくあなたさまの御なからひにはさしはなたれ給ひにけれはいよ くかの御つき くになりはてぬる世にてえましらひ給はすまたこのとしころかゝるひしりになりはてゝいまはかきりとよろつをおほしすてたりかゝるほとにすみ給ふ宮やけにけりいとゝしきよにあさましうあえなくてうつろひすみ給ふへき所のよろしきもなかりけれはうちといふところによしある山さともたまへりけるにわたり給ふおもひすてたま

へるよなれともいまはとすみはなれなんをあはれにおほさるあしろのけはひちかくみゝかしかましき川のわたりにてしつかなる思ひにかなはぬかたもあれといかゝはせむ花もみち水のなかれにも心をやるたよりによせていとゝしくなかめ給よりほかのことなしかくたえこもりぬる野山のすゑにもむかしの人ものし給はましかはとおもひきこえたまはぬおりなかりけり

みし人も宿もけふりになりにしをなにとて我身きえのこりけんいけるかひなくそおほしこかるゝやいとゝ山かさなれる御すみかにたつねまいる人なしあやしき下すなとゐなかひたる山かつとものみまれになれまいりつかうまつるみねのあさきりはるゝおりなくてあかしくらしたまふにこのうち山にひしりたちたるあさりすみけりさへいとかしこくてよのおほえもかろからねとおさ　くおほやけことにもいてつかへすこもりゐたるにこの宮のかくちかきほとにすみ給てさひしき御さまにたうときわさをせさせ給つゝ法もんをよみならひたまへはたうとかりきこえてつねにまいるとしころまなひしり給へる事とものふかき心をとききかせたてまつりいよいよこの世のいとかりそめにあちきなきことを申しらすれは心はかりはゝちすのうへに思ひのほりにこりなき池にもすみぬへきをいとかくおさなき人　くをみすてむうしろめたさはかりになむえひたみちにかたちをもかへぬなとへたてなく物かたりし給このあさりはれせい院にもしたしくさふらひて御経なとをしへきこゆる人なりけり京にいてたるつゐてにまいりてれいのさるへきふみなと御らむしてとはせ給ふこともあるつゐてに八の宮のいとかしこくないけうの御さえさとりふかくものし給けるかなさるへきにてむまれたまへる人にやものし給らむ心ふかく思ひすまし給へるほとまことのひしりのをきてになむみえ給ときこゆいまたかたちはかへたまはすやそくひしりとかこのわかき人　くのつけたなるあはれなること也なとのたまはすさい相中将も御前にさふらひ給てわれこそ世中をはいとすさましう思ひしりなからおこなひなと人にめとゝめらるはかりはつとめすくちおしくてすくしくれと人しれすおもひつゝそくなからひしりになり給ふ心のをきてやいかにとみゝとゝめてきゝたまふ出家の心さしはもとよりものし給へるをはかなきことにおもひとゝこほりいまとなりては心くるしき女子ともの御うへをえおもひすてぬとなんなけき侍りたまふとそうすさすかにものゝねめつるあさりにてけにはたこのひめ君たちのことひきあはせてあそひ給へる河なみにきをひてきこえ侍はいとおもしろくこくらく思ひやられ侍やとこたいにめつれはみかとほゝゑみ給ひてさるひしりのあたりにおひいてゝこのよのかたさまはたと　くしからむとおしはか

らるゝをおかしのことやうしろめたくおもひすてかたくもてわつらひ給らんを
もししはしもをくれむほとはゆつりやはしたまはぬなとそのたまはするこの院
のみかとは十のみこにそおはしましけるすさく院のこ六条院にあつけきこえ給
し入道の宮の御ためしをおもほしいてゝかの君たちをかなつれ　くなるあそひ
かたきになとうちおほしけり中将君中　くみこのおもひすましたまへらむ御心
はえをたいめむしてみたてまつらはやとおもふ心そふかくなりぬるさてあさり
のかへりいるにもかならすまいりて物ならひきこゆへくまつうち　くにもけし
き給はりたまへなとかたらひたまふみかとの御ことつてにてあはれなる御すま
ゐを人つてにきくことなときこえたまうて

世をいとふ心は山にかよへともやへたつ雲を君やへたつるあさりこの御つ
かひをさきにたてゝかの宮にまいりぬなのめなるきはのさるへき人のつかひた
にまれなる山かけにいとめつらしくまちよろこひ給て所につけたるさかななと
してさるかたにもてはやし給御返し

あとたえて心すむとはなけれとも世をうち山にやとをこそかれひしりのか
たをはひけしてきこえなし給へれは猶よにうらみのこりけるといとおしく御ら
むすあさり中将のたうしむふかけにものし給ふなとかたりきこえて法文なとの
心えまほしき心さしなんいはけなかりしよはひよりふかくおもひなからえさら
すよにありふるほとおほやけわたくしにいとまなくあけくらしわさとゝちこも
りてならひよみおほかたはか　くしくもあらぬ身にしも世中をそむきかほなら
むもはゝかるへきにあらねとをのつからうちたゆみてまきらはしくてなむすく
しくるをいとありかたき御ありさまをうけたまはりつたへしよりかく心にかけ
てなんたのみきこえさするなとねむころに申給ひしなとかたりきこゆ宮よのな
かをかりそめのことゝおもひとりいとはしき心のつきそむる事もわかみにうれ
へあるときなへての世もうらめしう思ひしるはしめありてなん道心もおこるわ
さなめるをとしわかく世中おもふにかなひなにこともあかぬことはあらしとお
ほゆる身のほとにさはた後の世をさへたとりしり給らんかありかたさこゝには
さへきにやたゝいとひはなれよとことさらに仏なとのすゝめおもむけたまふや
うなるありさまにてをのつからこそしつかなる思ひかなひゆけとのこりすくな
き心ちするにはか　くしくもあらてすきぬへかめるをきしかたゆくすゑさらに
えたる所なくおもひしらるゝをかへりては心はつかしけなる法のともにこそは
ものし給なれなとのたまひてかたみに御せうそこかよひみつからもまうて給ふ
けにきゝしよりもあはれにすまひたまへるさまよりはしめていとかりなる草の

いほりにおもひなしことそきたりおなしき山さとゝいへとさるかたにて心とまりぬへくのとやかなるもあるをいとあらましき水のをとなみのひゝきにものわすれうちしよるなと心とけて夢をたにみるへきほともなけにすこくふきはらひたりひしりたちたる御ためにかゝるしもこそ心とまらぬもよほしならめ女君たちなに心ちしてすくし給らむよのつねの女しくなよひたるかたはとをくやとおしはからるゝ御ありさまなり仏の御へたてにさうしはかりをへたてゝそおはすへかめるすき心あらむ人はけしきはみよりて人の御心はえをもみまほしうさすかにいかゝとゆかしうもある御けはひなりされとさるかたをおもひはなるるねかひに山ふかくたつねきこえたるほひなくすき　くしきなをさりことをうちいてあされはまむもことにたかひてやなとおもひかへして宮の御ありさまのいとあはれなるをねむころにとふらひきこえたまひたひ　くまいり給ひつゝおもひしやうにうはそくなからおこなふ山のふかき心法もんなとわさとさかしけにはあらていとよくのたまひしらすひしりたつ人さえあるほうしなとはよにおほかれとあまりこは　くしうけとをけなるしうとくのそうつそう正のきはゝ世にいとまなくきすくにてものゝ心をとひあらはさむもこと　くしくおほえたまふまたその人ならぬ仏の御てしのいむことをたもつはかりのたうとさはあれとけはひいやしくこと葉たみてこちなけにものなれたるいとものしくてひるはおほやけことにいとまなくなとしつゝしめやかなるよひのほとけちかき御まくらかみなとにめしいれかたらひ給ふにもいとさすかに物むつかしうなとのみあるをいとあてにこゝろくるしきさましてのたまひいつることの葉もおなし仏の御をしへをもみゝちかきたとひにひきませいとこよなくふかき御さとりにはあらねとよき人はものゝ心をえたまふかたのいとことにものしたまひけれはやう　くみなれたてまつり給たひことにつねにみたてまつらまほしうていとまなくなとして程ふるときは恋しくおほえ給この君のかくたうとかりきこえたまへれはれせい院よりもつねに御せうそこなとありてとしころをとにもおさ　くきこえ給はすさひしけなりし御すみかやう　く人めみるとき　くありおりふしにとふらいきこえ給こといかめしうこの君もまつさるへき事につけつゝおかしきやうにもまめやかなるさまにも心よせつかうまつり給こと三年はかりになりぬ秋のすゑつかた四きにあてゝし給御念仏をこの河つらはあしろのなみもこのころはいとゝみゝかしかましくしつかならぬをとてかのあさりのすむ寺のたうにうつろひたまひて七日のほとおこなひ給ふひめ君たちはいと心ほそくつれ　くまさりてなかめ給けるころ中将の君ひさしくまいらぬかなと思ひいてきこえ給けるまゝ

にあり明の月のまた夜ふかくさしいつるほとにいてたちていとしのひて御ともに人なともなくてやつれておはしけり川のこなたなれは舟なともわつらはて御馬にてなりけりいりもてゆくまゝに霧ふたかりて道もみえぬしけきの中をわけ給ふにいとあらましき風のきほひにほろ　くとおちみたるゝ木葉の露のちりかゝるもいとひやゝかに人やりならすいたくぬれ給ひぬかゝるありきなともおさ

くならひたまはぬ心ちに心ほそくおかしくおほされけり

　山おろしにたえぬこの葉の露よりもあやなくもろき我涙かな山かつのおとろくもうるさしとてすいしんのをともせさせ給はすしはのまかきをわけつゝそこはかとなき水のなかれともをふみしたくこまのあしをとも猶しのひてとようひし給へるにかくれなき御にほひそ風にしたかひてぬしゝらぬかとおとろくねさめの家ゝありけるちかくなるほとにそのことゝもきゝわかれぬものゝねともいとすこけにきこゆつねにかくあそひたまふときくをついてなくてみやの御ことのねのなたかきもえきかぬそかしよきおりなるへしとおもひつゝいり給へはひわのこゑのひゝきなりけりわうしきてうにしらへてよのつねのかきあはせなれと所からにやみゝなれぬ心ちしてかきかへすはちのおとも物きよけにおもしろしさうのことあはれになまめひたるこゑしてたえ　くきこゆしはしきかまほしきにしのひ給へと御けはひしるくきゝつけてとのひ人めくおのこなまかたくなしきいてきたりしか　くなんこもりおはします御せうそこをこそきこえさせめと申すなにかしかゝきりある御おこなひの程をまきらはしきこえさせむにあひなしかくぬれぬれまいりていたつらにかへらむうれへをひめ君の御かたにきこえてあはれとの給はせはなむなくさむへきとのたまへはみにくきかほうちゑみて申させ侍らむとてたつをしはしやとめしよせてとしころ人つてにのみきゝてゆかしくおもふ御ことのねともをうれしきおりかなしはしすこしたちかくれてきくへきものゝくまありやつきなくさしすきてまいりよらむほとみなことやめ給ひてはいとほひなからんとの給御けはひかほかたちのさるななをしき心ちにもいとめてたくかたしけなくおほゆれは人きかぬときはあけくれかくなんあそはせとしも人にても宮このかたよりまいりたちましる人侍るときはをともせさせ給はすおほかたかくて女たちおはしますことをはかくさせ給ひなへての人にしらせたてまつらしとおほしのたまはするなりと申せはうちわらひてあちきなき御ものかくしななりしかしのひ給ふなれとみな人ありかたき世のためしにきゝいつへかめるをとの給てなをしるへせよわれはすき　くしき心なとなき人そかくておはしますらむ御ありさまのあやしくけになへてにおほえ給はぬな

りとこまやかにのたまへはあなかしこ心なきやうに後のきこえや侍らむとてあなたの御まへはたけのすいかひしこめてみなへたてことなるをゝしへよせたてまつれり御ともの人はにしのらうによひすへてこのとのゐ人あひしらふあなたにかよふへかめるすひかひのとをすこしをしあけてみ給へは月おかしきほとに霧わたれるをなかめてすたれをみしかくまきあけて人　くゐたりすのこにいとさむけに身ほそくなえはめるわらはひとりおなしさまなるおとなゝとゐたりうちなる人一人はしらにすこしゐかくれてひはをまへにをきてはちをてまさくりにしつゝゐたるに雲かくれたりつる月のにはかにいとあかくさしいてたれはあふきならてこれしても月はまねきつへかりけりとてさしのそきたるかほいみしくらうたけにゝほいやかなるへしそひふしたる人はことのうへにかたふきかゝりている日をかへすはちこそありけれさまことにもおもひをよひ給ふ御心かなとてうちわらひたるけはひいますこしおもりかによしつきたりをよはすともこれも月にはなるゝ物かはなとはかなきことをうちとけの給かはしたるけはひともさらによそに思ひやりしにはにすいとあはれになつかしうおかしむかし物かたりなとにかたりつたへてわかき女房なとのよむをもきくにかならすかやうの事をいひたるさしもあらさりけむとにくゝおしはからるゝをけにあはれなる物のくまありぬへき世なりけりと心うつりぬへしきりのふかけれはさやかにみゆへくもあらす又月さしいてなんとおほすほとにおくのかたより人おはすとつけきこゆる人やあらむすたれおろしてみないりぬおとろきかほにはあらすなこやかにもてなしてやをらかくれぬるけはひともきぬのをともせすいとなよらかに心くるしくていみしうあてにみやひかなるをあはれとおもひ給ふやをらいてて京に御車ゐてまいるへく人はしらせつありつるさふらひにおりあしくまいり侍にけれと中　くうれしくおもふことすこしなくさめてなむかくさふらふよしきこえよいたうぬれにたるかこともきこえさせむかしとのたまへはまいりてきこゆかくみえやしぬらんとはおほしもよらてうちとけたりつる事ともをきゝやしたまひつらむといとみしくはつかしあやしくかうはしくにほふ風の吹つるをおもひかけぬほとなれはおとろかさりける心をそさよと心もまとひてはちをはさうす御せうそこなとつたふる人もいとうゐ　くしき人なめるをおりからにこそよろつのこともとおほひてまた霧のまきれなれはありつるみすのまへにあゆみいてゝつゐい給ふ山さとひたるわか人ともはさしいらへむことのはもおほえて御しとねさしいつるさまもたと　くしけなりこのみすのまへにはゝしたなく侍りけりうちつけにあさき心はかりにてはかくもたつねまいるましき山のかけ

ちにおもふ給ふるをさまことにこそかく露けきたひをかさねてはさりとも御らむししるらむとなんたのもしう侍といとまめやかにの給わかき人　くのなたらかにものきこゆへきもなくきえかへりかゝやかしけなるもかたはらいたけれは女はらのおくふかきをおこしいつるほとひさしくなりてわさとめひたるもくるしうてなにこともおもひしらぬありさまにてしりかほにもいかゝはきこゆへくといとよしありあてなるこゑしてひきいりなからほのかにのたまふかつしりなからうきをしらすかほなるもよのさかとおもふたまへしるをひとゝころしもあまりおほめかせ給らんこそくちおしかるへけれありかたうよろつをおもひすましたる御すまゐなとにたくひきこえさせ給御心のうちはなにこともすゝしくをしはかられ侍れは猶かくしのひあまり侍ふかさあさゝのほともわかせ給はんこそかひは侍らめよのつねのすき　くしきすちにはおほしめしはなつへくやさやうのかたはわさとすゝむる人侍りともなひくへうもあらぬ心つよさになんをのつからきこしめしあはするやうも侍りなんつれ　くとのみすくし侍よの物かたりもきこえさせ所にたのみきこえさせ又かく世はなれてなかめさせ給らん御心のまきらはしにはさしもおとろかさせたまふはかりきこえなれ侍らはいかに思ふさまに侍らむなとおほくの給へはつゝましくいらへにくゝておこしつるおい人のいてきたるにそゆつりたまふたとしへなくさしすくしてあなかたしけなやかたはらいたきおましのさまにも侍かなみすのうちにこそわかき人　くはものゝほとしらぬやうに侍こそなとしたゝかゝにいふこゑのさたすきたるもかたはらいたく君たちはおほすいともあやしく世中にすまゐ給人のかすにもあらぬ御ありさまにてさもありぬへき人　くたにとふらひかすまへきこえ給もみえきこえすのみなりまさり侍めるにありかたき御心さしのほとはかすにも侍らぬ心にもあさましきまておもひたまへ侍をわかき御心ちにもおほししりなからきこえさせたまひにくきにや侍らむといとつゝみなくものなれたるもなまにくきものからけはひいたう人めきてよしあるこゑなれはいとたつきもしらぬ心ちしつるにうれしき御けはひにこそなにこともけにおもひしり給けるたのみこよなかりけりとてよりゐ給へるをき丁のそはよりみれはあけほのやう　くものゝ色わかるゝにけにやつしたまへるとみゆるかりきぬすかたのいとぬれしめりたるほとうたてこの世のほかのにほひにやとあやしきまてかほりみちたりこのおい人はうちなきぬさしすきたるつみもやとおもふたまへしのふれとあはれなるむかしの御物かたりのいかならむついてにうちいてきこえさせかたはしをもほのめかししろしめさせむとゝしころねんすのついてにもうちませおもふ給へわたるし

るしにやうれしきおりに侍をまたきにおほゝれ侍涙にくれてえこそきこえさせ
す侍けれとうちわなゝくけしきまことにいみしくものかなしと思へりおほかた
さたすきたる人は涙もろなる物とはみきゝ給へといとかうしもおもへるもあや
しうなり給てこゝにかくまいることはたひかさなりぬるをかくあはれしりたま
へる人もなくてこそ露けきみちのほとにひとりのみそほちつれうれしきつゐて
なめるをことなのこひたまひそかしとのたまへはかゝるつゐてしも侍らしかし
又侍りとも夜のまのほとしらぬ命のたのむへきにも侍らぬをさらはたゝかゝる
ふるもの世に侍けりとはかりしろしめされ侍らなむ三条の宮に侍しこしゝうは
かなくなり侍にけるとほのきゝ侍しそのかみむつましうおもふ給へしおなし程
の人おほくうせ侍にける世のすゑにはるかなるせかいよりつたはりまうてきて
このいつとせむとせのほとなむこれにかくさふらひ侍しろしめさしかしこのこ
ろとう大納言と申なる御このかみの右衛門のかみにてかくれ給にしはものゝつ
ゐてなとにやかの御うへとてきこしめしつたふる事も侍らむすき給ていくはく
もへたゝらぬ心ちのみし侍そのおりのかなしさもまた袖のかはくおり侍らすお
もふたまへらるゝをかくおとなしくならせ給にける御よはひのほとも夢のやう
になんかの権大納言の御めのとに侍しは弁かはゝになむ侍しあさ夕につかうま
つりなれ侍しに人かすにも侍らぬみなれと人にしらせす御心よりはたあまりけ
ることをおり　くうちかすめのたまいしをいまはかきりになり給にし御やまひ
のするゑつかたにめしよせていさゝかの給をくことなむ侍しをきこしめすへきゆ
へなんひとこと侍れとかはかりきこえいて侍にのこりをとおほしめす御心侍ら
はのとかになんきこしめしはて侍へきわかき人　くもかたはらいたくさしすき
たりとつきしろひ侍もことはりになむとてさすかにうちいてすなりぬあやしく
夢かたりかむなきやうのものゝとはすかたりすらむやうにめつらかにおほさる
れとあはれにおほつかなくおほしわたることのすちをきこゆれはいとおくゆか
しけれとけに人めもしけしさしくみにふる物かたりにかゝつらひて夜をあかし
はてむもちこ　くしかるへけれはそこはかとおもひわくことはなきものからい
にしへの事ときゝ侍も物あはれになんさらはかならすこのゝこりきかせ給へ霧
はれゆかははしたなかるへきやつれをおもなく御らんしとかめられぬへきさま
なれはおもふたまふる心のほとよりはくちおしうなむとてたちたまふにかのお
はしますてらのかねのこゑかすかにきこえてきりいとふかくたちわたれりみね
のやへ雲おもひやるへたておほくあはれなるになをこのひめ君たちの御心のう
ちとも心くるしうなにことをおほしのこすらむかくいとおくまりたまへるもこ

とはりそかしなとおほゆ

あさほらけ家路もみえすたつねこしまきのを山は霧こめてけり心ほそくも

侍かなとたちかへりやすらひ給へるさまを宮この人のめなれたるたに猶いとこ

とにおもひきこえたるをまいていかゝはめつらしうみきこえさらん御返きこえ

つたへにくけにおもひたれはれいのいとつゝましけにて

雲のゐる嶺のかけちを秋きりのいとゝへたつるころにもあるかなすこしう

ちなけひたまへるけしきあさからすあはれなりなにはかりおかしきふしはみえ

ぬあたりなれとけにこゝろくるしきことおほかるにもあかうなりゆけはさすか

にひたおもてなる心ちして中　くなるほとにうけたまはりさしつることおほか

るのこりはいますこしおもなれてこそはうらみきこえさすへかめれさるはかく

世の人めひてもてなし給へくは思はすに物おほしわかさりけりとうらめしうな

んとてとのゐ人かしつらひたるにしおもてにおはしてなかめ給ふあしろは人さ

はかしけなりされとひをもよらぬにやあらむすさましけなるけしきなりと御と

もの人　くみしりていふあやしき舟ともにしはかりつみをの　くなにとなき世

のいとなみともにゆきかふさまとものはかなき水のうへにうかひたるたれもお

もへはおなしことなるよのつねなさなりわれはうかはすたまのうてなにしつけ

き身とおもふへき世かはとおもひつゝけらるすゝりめしてあなたにきこえ給ふ

橋ひめの心をくみてたかせさすさほのしつくに袖そぬれぬるなかめ給ふら

むかしとてとのひ人にもたせたまへりいとさむけにいらゝきたるかほしてもて

まいる御かへりかみのかなとおほろけならむはゝつかしけなるをときをこそか

ゝるおりにはとて

さしかへるうちの河おさあさ夕のしつくや袖をくたしはつらむ身さへうき

てといとおかしけにかき給へりまおにめやすくもものし給けりと心とまりぬれ

と御車ゐてまいりぬと人　くさはかしきこゆれはとのゐ人はかりをめしよせて

かへりわたらせたまはむほとにかならすまいるへしなとのたまふぬれたる御そ

ともはみなこの人にぬきかけ給ひてとりにつかはしつる御なをしにたてまつり

かへつおい人の物かたり心にかゝりておほしいてらるおもひしよりはこよなく

まさりておかしかりつる御けはひともおも影にそひて猶おもひはなれかたき世

なりけりと心よはく思しらる御ふみたてまつり給ふけさうたちてもあらすしろ

きしきしのあつこえたるにふてひきつくろひえりてすみつきみところありてか

き給ふうちつけなるさまにやとあひなくとゝめ侍てのこりおほかるも心くるし

きわさになむかたはしきこえをきつるやうにいまよりはみすのまへも心やすく

おほしゆるすへくなむ御山こもりはて侍らむ日かすもうけたまはりをきていふせかりしきりのまよひもはるけ侍らむなとそいとすくよかにかき給へるさこんのさうなる人御つかひにてかのおい人たつねてふみもとらせよとのたまふとのひ人かさむけにてさまよひしなとあはれにおほしやりておほきなるひはりこやうのものあまたせさせ給ふまたの日かの御てらにもたてまつり給ふ山こもりのそうともこの比のあらしにはいと心ほそくくるしからむをさておはしますほとのふせ給ふへからんとおほしやりてきぬわたなとおほかりけり御おこなひはてゝいてたまふあしたなりけれはをこなひ人ともにわたきぬけさ衣なとすへてひとくたりのほとつつあるかきりの大とこたちに給ふとのゐ人か御ぬきすてのえむにいみしきかりの御そともえならぬしろきあやの御そのなよ　くといひしらすにほへるをうつしきて身をはたえかへぬものなれはにつかはしからぬ袖のかを人ことにとかめられめてらるゝなむ中　く所せかりける心にまかせて身をやすくもふるまはれすいとむくつけきまて人のおとろくにほひをうしなひてはやとおもへと所せき人の御うつりかにてえもすゝきすてぬそあまりなるや君はひめ君の御返ことゝいとめやすくこめかしきをおかしくみ給ふ宮にもかく御せうそこありきなと人　くきこえさせ御らむせさすれはなにかはけさうたちてもてなひ給はむも中　くうたてあらむれいのわか人にゝぬみ心はえなめるをなからむ後もなとひとことうちほのめかしてしかはさやうにて心そとめたらむなとの給けり御みつからもさま　くの御とふらひの山のいはやにあまりしことなとのたまへるにまうてんとおほして三の宮のかやうにおくまりたらむあたりのみまさりせむこそおかしかるへけれとあらましことにたにのたまふ物をきこえはけまして御心さはかしたてまつらむとおほしてのとやかなる夕くれにまいり給へりれいのさま　くなる御物かたりきこえかはし給ふついてにうちの宮の御事かたりいてゝみしあか月のありさまなとくはしくきこえ給ふに宮いとせちにおかしとおほひたりされはよと御けしきをみていとゝ御心うこきぬへくいひつゝけたまふさてそのありけんかへりことはなとかみせ給はさりしまろならましかはとうらみ給ふさかしいとさま　く御らむすへかめるはしをたにみせさせたまはぬかのわたりはかくいともむもれたる身にひきこめてやむへきけはひにも侍らねはかならす御らむせさせはやとおもひ給れといかてかたつねよらせ給へきかやすきほとこそすかまほしくはいとよくすきぬへきよに侍りけれうちかくろへつゝおほかめるかなさるかたにみところありぬへき女のもの思はしきうちしのひたるすみかとも山里めひたるくまなとにをのつから侍へかめりこのきこえさす

るわたりはいとよつかぬひしりさまにてこち　くしうそあらむとゝしころ思あなつり侍てみゝをたにこそとゝめ侍らさりけれほのかなりし月影のみをとりせすはまをならんはやけはひありさまはたさはかりならむをそあらまほしきほとゝはおほえ侍へきなときこえたまふはて　くはまめたちていとねたくおほろけの人に心うつるましき人のかくふかくおもへるをおろかならしとゆかしうおほすことかきりなくなり給ひぬなをまた　くよくけしきみたまへと人をすすめ給てかきりある御身のほとのよたけさをいとはしきまて心もとなしとおほしたれはおかしくていてやよしなくそ侍しはし世中に心とゝめしと思ふ給るやうある身にてなをさりこともつゝましう侍を心なからかなはぬ心つきそめなはおほきにおもひにたかふへきことなむ侍へきときこえ給へはいてあなこと　くしれひのおとろおとろしきひしりことはみはてゝしかなとてわらひ給ふ心のうちにはかのふる人のほのめかししすちなとのいとゝうちおとろかれて物あはれなるにおかしとみることもめやすしときくあたりもなにはかり心にもとまらさりけり十月になりて五六日のほとにうちへまうてたまふあしろをこそこの比は御らむせめときこゆる人　くあれとなにかそのひをむしにあらそふ心にてあしろにもよらむとそきすて給てれいのいとしのひやかにていてたち給かろらかにあしろくるまにてかとりのなをしさしぬきぬはせてことさらひき給へり宮まちよろこひ給て所につけたる御あるしなとおかしうしなしたまふくれぬれはおほとなふらちかくてさき　くみさしたまへるふみとものふかきなとあさりもさうしおろしてきなといはせ給ふうちもまとろます河かせのいとあらましきに木葉のちりかふをと水のひゝきなとあはれもすきて物おそろしく心ほそき所のさまなりあけかたちかくなりぬらんと思ふほとにありししのゝめおもひいてられて琴のねのあはれなることのついてつくりいてゝさきのたひの霧にまとはされ侍し明ほのにいとめつらしきものゝねひとこゑうけたまはりしのこりなむ中　くにいといふかしうあかすおもふたまへらるゝなときこえたまふ色をもかをもおもひすてゝし後むかしきゝしこともみなわすれてなむとのたまへと人めして琴とりよせていと月なくなりにたりやしるへするものゝねにつけてなんおもひいてらるへかりけるとてひわめしてまらうとにそゝのかし給ふとりてしらへたまふさらにほのかにきゝ侍しおなしものとも思ふたまへられさりけり御ことのひゝきからにやとこそおもふたまへしかとて心とけてもかきたてたまはすいてあなさかなやしか御みみとまるはかりのてなとはいつくよりかこゝまてはつたはりこむあるましき御ことなりとてきむかきならしたまへるいとあはれに心すこしかた

へはみねのまつ風のもてはやすなるへしいとたと　くしけにおほめき給て心はえありてひとつはかりにてやめたまひつこのわたりにおほえなくており　くほのめくさうのことのねこそ心えたるにやときくおり侍れと心とゝめてなともあらてひさしうなりにけりや心にまかせてをの　くかきならすへかめるは川なみはかりやうちあはすらむろなうものゝようにすはかりのはうしなともとまらしとなむおほえ侍とてかきならし給へとあなたにきこえたまへとおもひよらさりしひとりことをきゝ給ひけんたにある物をいとかたはならむとひきいりつゝみなきゝ給はすたひ　くそゝのかしたまへととかくきこえすさひてやみ給ひぬめれはいとくちおしうおほゆそのついてにもかくあやしうよつかぬおもひやりにてすくすありさまとものおもひのほかなる事なとはつかしうおほひたり人にたにいかてしらせしとはくゝみすくせとけふあすともしらぬ身のゝこりすくなさにさすかにゆくするとをき人はおちあふれてさすらへん事これのみこそけによをはなれんきはのほたしなりけれとうちかたらひ給へは心くるしうみたてまつりたまふわさとの御うしろみたちはかはかしきすちには侍すともうと　くしからすおほしめされんとなむおもふたまふるしはしもなからへ侍らむいのちの程はひとこともかくうちいてきこえさせてむさまをたかへ侍ましくなむなと申給へはいとうれしきことゝおほしのの給さてあか月かたの宮の御おこなひしたまふほとにかのおい人めしいてゝあひたまへりひめ君の御うしろみにてさふらはせ給ふ弁の君とそいひける年も六十にすこしたらぬほとなれとみやひかにゆへあるけはひして物なときこゆ古権大納言の君のよととともにものをおもひつゝやまひつきはかなくなりたまひにしありさまをきこえいてゝなくことかきりなしけによその人のうへときかむたにあはれなるへきふることゝもをましてとしころおほつかなくゆかしういかなりけんことのはしめにかと仏にもこの事をさたかにしらせ給へとねんしつるしるしにやかく夢のやうにあはれなるむかしかたりをおほえぬついてにきゝつけつらむとおほすに涙とゝめかたかりけりさてもかくそのよの心しりたる人ものこりたまへりけるをめつらかにもはつかしうもおほゆることのすちに猶かくいひつたふるたくひや又もあらむとしころかけてもきゝをよはさりけるとのたまへはこしゝうと弁とはなちてまたしる人侍らしひとことにてもまたことひとにうちまねひ侍らすかくものはかなくかすならぬ身のほとに侍れとよるひるかの御かけにつきたてまつりて侍しかはをのつからものゝけしきをもみたてまつりそめしに御心よりあまりておほしける時ゝたゝふたりのなかになんたまさかの御せうそこのかよひも侍しかたはらいたけれは

くはしくきこえさせすいまはのとちめになり給ていさゝかのたまいをくことの
侍しをかゝる身にはをき所なくいふせくおもふ給へわたりつゝいかにしてかは
きこしめしつたふへきとはか　くしからぬ念すのついてにも思ふたまへつるを
仏は世におはしましけりとなんおもふたまへしりぬる御らむせさすへきものも
侍りいまはなにかはやきもすて侍なむかくあさ夕のきえをしらぬ身のうちすて
侍なはうちゝるやうもこそといとうしろめたくおもふたまふれとこの宮わたり
にもときときほのめかせたまふをまちいてたてまつりてしはすこしたのもしく
かゝるおりもやとねんし侍へるちからいてまうてきてなむさらにこれはこの世
のことにも侍らしとなく　くこまかにむまれたまひけるほとのこともよくおほ
えつゝきこゆむなしうなり給しさはきにはゝに侍し人はやかてやまひつきてほ
ともへすかくれ侍にしかはいとゝおもふたまへしつみふち衣たちかさねかなし
きことをおもひたまへし程にとしころよからぬ人の心をつけたりけるか人をは
かりこちてにしのうみのはてまてとりもてまかりにしかは京のことさへあとた
えてその人もかしこにてうせ侍にし後とゝせあまりにてなんあらぬよの心ちし
てまかりのほりたりしをこの宮はちゝかたにつけてわらはよりまいりかよふゆ
へ侍しかはいまはかう世にましらふへきさまにも侍らぬをれせい院の女御殿の
御かたなとこそはむかしきゝなれたてまつりしわたりにてまいりよるへく侍し
かとはしたなくおほえ侍てえさしいて侍らてみ山かくれのくち木になりにて侍
なりこしゝうはいつかうせ侍にけんそのかみのわかさかりとみ侍し人はかすゝ
くなくなり侍にけるするゑのよにおほくの人にをくるゝいのちをかなしくおもひ
給へてこそさすかにめくらひ侍れなときこゆるほとにれひのあけはてぬよしさ
らはこのむかし物かたりはつきすへくなんあらぬまた人きかぬ心やすき所にて
きこえんしゝうといひし人はほのかにおほゆるはいつゝむつはかりなりし程に
やにはかにむねをやみてうせにきとなむきくかゝるたひめむなくはつみおもき
身にてすきぬへかりける事なとのたまふさゝやかにおしまきあわせたるほくと
ものかひくさきをふくろにぬひいれたるとりいててたてまつるおまへにてうし
なはせ給へわれなをいくへくもあらすなりにたりとのたまはせてこの御ふみを
とりあつめてたまはせたりしかはこしゝうにまたあひみ侍らむついてにさたか
につたへまいらせむとおもひたまへしをやかてわかれ侍にしもわたくしことに
はあかすかなしうなんおもふ給ふるときこゆつれなくてこれはかくいたまいつ
かやうのふる人はとはすかたりにやあやしきことのためしにいひいつらむとく
るしくおほせとかへす　くもちらさぬよしをちかひつるさもやとまたおもひみ

たれたまふ御かゆこはいひなとまいりたまふ昨日はいとまひなりしをけふはうちの御物いみもあきぬらん院の女一の宮なやみ給ふ御とふらひにかならすまいるへけれはかた　くいとまなく侍をまたこのころすくして山のもみち散らぬさきにまいるへきよしきこえたまふかくしはしはたちよらせたまふひかりに山のかけもすこしものあきらむる心ちしてなんなとよろこひきこえたまふかへり給ひてまつこのふくろをみ給へはからのふせむれうをぬひて上といふもしをうへにかきたりほそきくみしてくちのかたをゆひたるにかの御名のふうつきたりあくるもおそろしうおほえたまふ色　くのかみにてたまさかにかよひける御ふみの返ことといつゝむつそあるさてはかの御てにてやまひはおもくかきりになりにたるにまたほのかにもきこえむことかたくなりぬるをゆかしうおもふことはそひにたり御かたちもかはりておはしますらむかさま　くかなしきことをみちのくにかみ五六枚につふ　くとあやしきとりのあとのやうにかきて

　めのまへにこの世をそむく君よりもよそにわかるゝ玉そかなしき又はしにめつらしくきゝ侍るふた葉のほともうしろめたうおもふたまふるかたはなけれと

　命あらはそれともみまし人しれぬ岩ねにとめし松のおいするかきさしたるやうにいとみたりかはしうてこしゝうの君にとうへにはかきつけたりしみといふむしのすみかになりてふるめきたるかひくさゝなからあとはきえすたゝいまかきたらんにもたかはぬことの葉とものこま　くとさたかなるをみ給ふにけにおちゝりたらましよとうしろめたういとおしき事ともなりかゝること世にまたあらむやと心ひとつにいとゝ物思はしさそひてうちへまいらむとおほしつるもいてたゝれす宮のおまへにまいり給へれはいとなに心もなくわかやかなるさまし給ひて経よみたまふをはちらひてもてかくし給へりなにかはしりにけりともしられたてまつらむなとこゝろにこめてよろつにおもひゐたまへり